

論文要旨

氏名 _____ 南部みゆき _____

論文題目（外国語の場合は、和訳を併記すること。）

_____ 会話コーパスを利用した看護師と患者間の言語コミュニケーション研究 _____

_____ ー特徴語・会話構造・ポライトネスを中心とした分析と看護英語教育への応用ー _____

論文要旨（別様に記載すること）

- (注) 1. 論文要旨は、A4版とする。
2. 和文の場合は、4000字から8000字程度、外国語の場合は、2000語から4000語程度とする。
3. 「論文要旨」は、フロッピーディスク（1枚）を併せて提出すること。
（氏名及びソフト名を記入したラベルを張付すること。）

【論文内容の要旨】

1. 本論文の研究課題

医療の分野では、在日外国人の増加に伴う外国人患者の増加や、高まる国際医療ニーズなどめまぐるしい環境の変化に伴い、英語の対応を求められる機会が増えている。本研究においても、大学病院に勤務する看護師を対象に行った質問紙調査やインタビューの結果から、実践的な看護英語の提供が急務の課題であることが確認できた。しかし、現在市販されている看護英語教科書は、必ずしも実際の看護場面を反映していない（川北, 2003; 新井・佐野, 2002 他）。実践的な看護英語の提供には、患者の看護場面で何か起きているかについて実態の把握とデータの収集、分析が不可欠であろう。

本論文では、英語圏の看護師と患者の会話を収集したコーパスデータを利用して多角的に分析していることが最大の特長である。看護師の言語コミュニケーションについて、主に 1) 特徴語、2) 会話構造、そして良好な人間関係の観点から、3) politeness に着眼し、全体を通して量的・質的に分析を行った。専門分野の英語習得を目的とした ESP 教育で重要なのは、現実に応じたデータ分析結果を教材に反映させることである。そうすることにより、看護場面で通用する「自然らしさ」(naturalness) の習得につながり (Hyland, 2008)、学習者の高いモチベーションの維持が期待出来る。本論文では、分析の結果を看護教育のシラバスデザインにどのように応用できるかについても考察し、学習者がコーパスデータを駆使しながら学習出来る Data-driven learning (データ駆動型学習) に密接に関連する語彙シラバスを採用し、3つのシラバスデザインを提示した。

2. 本論文の章節構成

本論文の章節の構成は、序章、第1章 専門英語 (ESP) 研究の意義と必要性、第2章 先行研究、第3章 研究方法、第4章 コーパスを利用した看護場面における看護師の言語コミュニケーションの分析、第5章 看護教育への応用、終章、参考文献・資料、付録となっている。

序章では、本論文の研究の意義と目的について述べ、章節の構造について説明した。特定の分野における英語の習得を目指す ESP 教育においては、自然なテキストを調査分析する実証性の高さから、コーパス研究の分析の成果が、教室や職場での訓練活動に応用可能なシラバスのデザインに役立つとの報告がある (池本 他, 2010; Watanabe et al., 2006; 小山・Nagano, 2001 他)。本論文の最大の特長は、看護師と患者の実際の会話コーパスを

利用していることである。看護師と患者の会話を分析した研究例はあるものの、データ量が極めて限定的であり、看護師と患者の会話コーパスデータを利用した研究例は殆どない。そのため、英語圏における看護師が実際にはどのような言語的配慮をしながら患者と接しているかについては、殆ど解明されていないのが現状である。本論文で扱うデータは、コーパス言語学研究で一般的に利用されるデータ量と比較すると規模はかなり小規模であるが（総語数 24,437 語）、「看護師と患者」という特定された会話データを利用しており、殆どまだ例がない看護英語研究分野の先駆的研究となり得る点で、希少価値がある。分析には、詳細な会話の構造や politeness を分析するため、ジャンル理論アプローチによる質的研究と、コーパスを利用した量的研究を組み合わせることも序章で示している。本論文の章節構成についても序論で示した。

第 1 章では、ESP 教育がどのような位置づけにあるのか、分類表（田地野 他, 2008）などを用いて概観し、その目的と意義について考察した。九州地区の大学における ESP 教育の実施状況報告（横山, 2006）から、大学で求められている ESP 教育は、その必要性を認識しているものの、実施方法は多種多様であることがわかる。ESP 教育では、まず、ニーズ分析が非常に重要である（和田, 2003）。本論文でも、まずは病院看護師の英語ニーズを知るために質問紙調査を行った。その結果、6 割を超える看護師が、過去に少なくとも 1 回以上外国人対応の経験を持ち、殆どが「日常英会話」と「医療英会話」の習得の必要性を感じていた。「日常会話の上に看護会話が成り立つ」と考えている結果の裏づけとも言えるものである。また、本研究での分析の視点を得るために、日常の看護では言語上どのようなことに配慮しながら患者と接しているかについてフォーカスグループ・インタビューを実施し、〈患者の尊重〉と〈親近感の創出〉という大きく 2 つのカテゴリーを抽出した。看護師が日頃の患者とのコミュニケーションの中で politeness ストラテジーを行っている実態を知り、英語を話す患者にも同じような方略を用いたい、というニーズの高まりが伺えた。

第 2 章では、「コーパス言語学研究」、「会話構造研究」、「politeness 研究」の先行研究を行った。コーパス言語学研究では、ESP 教育におけるコーパスが担う役割の展望と、特殊分野の英語の使用実態を教育内容に反映させる必要性を改めて確認した。本論文で扱う会話コーパスは、看護師と患者の会話データであり、総語数 24,437 語からなるミニコーパスである。小規模ではあるが、これまでに例の無い特殊目的コーパスで Bowker & Pearson (2002) が提唱する最低語数の 10,000 語を十分に満たしている。看護師の対患者という観

点からの会話コーパス構築に向けて、先駆的研究となる可能性を示唆した。「会話構造研究」では、ディスコース・コミュニティ内における伝達行為を1つのジャンルとみなし、会話の過程における伝達行動を分析するジャンル分析によって、完結性のある会話構造や Move 分析を行うことが可能になるという示唆が得られた。また、コーパスを利用してジャンル視点のアプローチが可能であるとする Koester (2004, 2006) の提案は、本論文の特長につながっている。また、「politeness 研究」では、事前の質問紙調査やインタビューで判明した患者に配慮した言語行動を詳しく分析するための視点を得るため、B&L (1987) の politeness 理論を取り入れて概観した。さらに、politeness を逸脱した impoliteness の視点は、これまであまり研究されてこなかったが、Stewart (2008) を参考に、話し手自身の face protective strategy (face 防御ストラテジー) がもたらすコミュニケーション上の効果について、Culpeper et al. (2003) の応答モデルを援用した。その結果、患者との何らかの対立構造が生じたときの、応答の進め方にも着目した分析を行う視点を得ることが出来た。本章の先行研究によって、本論文はコーパス分析、ジャンル理論による会話分析、politeness 分析が中心の、量的・質的アプローチによる研究が有効であると結論づけた。

第3章では、研究方法について述べ、データ情報を紹介するとともに、分析の方法について説明した。コーパスデータは、総語数 24,437 語、type が 2,258 で、看護師 69 名 (延べ) と患者 68 名 (延べ) による 57 の独立した対面場面で構成され、Nurse-Patient Corpus (以下、N-P Corpus) と名付けた。「コーパス分析」の説明では、分析ソフトウェア AntConc 3.2.1 (Anthony, 2007) の特徴について説明し、検索対象語を含むコンコードスラインを一括表示する KWIC 検索、共起語リストの作成、n-gram による lexical bundle の検索、語彙リスト作成、特徴語の抽出などを行うことを述べた。「会話構造」の分析の方法としては、Koester (2004, 2006) のジャンル理論の視点による会話分析を取り入れることを述べている。本研究では、データを「面接型」・「病室訪問型」・「病室外型」の3つのタイプに分け、会話の流れ、会話の開始部と終了部、会話の順番取り、隣接対等について、実際の会話データの事例分析を行った。「発話行為分析」には、1つの発話が「文字通りの意味」とともに、語用論的見地から「コミュニケーション上持つ意図」という2つの側面から分類するコーディングシステムである Verbal Response Mode (Stiles, 1992) を利用することを紹介した。「politeness 分析」の理論的枠組みには、B&L (1987) の politeness 理論を採用したが、コンコードスラインの表示等により分布や頻度を確認出来るよう、コーパス分析の視点も取り入れた。さらに、これまであまり研究されてこなかった、impoliteness

の分析については、Stewart (2008) の face protective strategy と Culpeper et al. (2003) の応答モデルを援用した。

第4章では、第3章で述べた手法で N-P Corpus の分析を行い、分析結果の報告と考察を述べた。「コーパス分析」では、分析の出発点となる語彙頻度表を作成した。その結果、2,230 語からなる語彙リストが完成し、通常の会話と同様、人称代名詞の ‘I’ (884 回) と ‘you’ (834 回) が高頻度で現れた。頻度表をもとに、参照コーパスとして広く援用される British National Corpus (以下、BNC) と比較して特徴語を調べたところ、2 人称代名詞所有格の your が特徴語リストの 9 位に表出し、共起のコロケーション分析を行った結果、‘your nurse’ が筆頭で 11 回、続いて your doctor が 9 回、your blood が 7 回と続き、N-P Corpus の特徴的な表現として生じた。また、法助動詞として唯一 10 位以内に現れた can の生起をきっかけとし、人称代名詞と法助動詞の組みあわせの分析を行った。その結果、最多の 25 回で生じた ‘we can’ の表現は、その殆ど (23 回) が看護師による使用であり、患者に対する positive politeness strategy であると同時に、看護師自身の negative face の保持であると分析した。他に、法助動詞については、看護師による行動の決定権を示す意志表明や、予見を表す発言、特に going to / gonna の使用が、通常の会話より目立った。また、N-P Corpus に特徴的に生じた、lexical bundle (意味のまとまりのある語彙の連結) を調べたところ、go to the bathroom / make sure you're ok / let's get your blood / ask you some questions / will take care of / sleep well at night など、医療的・看護的な特殊用語を含んだものであり、N-P Corpus 特有の lexical bundle として位置づけることが出来た。そこで、N-P Corpus の総語数を基にコーパスサイズが 100 万語になるよう換算し (Biber & Barbieri 2007)、4-gram の調整頻度を算出すると、上記の、例えば go to the bathroom 、make sure you're ok、let's get your blood は、 $164 \cdot 123 \cdot 123$ 回という高頻度で現れると予想されることから、看護師と患者の会話の特徴の 1 つは、両者の面会や辞去、相手の気分や体調を尋ねる表現であると考えられる。

4 章の第 2 節の「会話構造分析」では、ジャンルに分析の焦点を当て、N-P Corpus を 3 つの場面のタイプに分け、事例研究を行った。まず「面接型」においては、比較的明確な会話の開始部と終了部が確認された。また、看護師による自分の名乗りが多く、コーパス分析でも説明した ‘your nurse’ が患者に対する名乗りで使用されることがこのタイプの場面で確認出来た。他、Bill という患者に ‘Hello, Bill-0’ など、意識的に韻を踏ませて呼びかけることで親近感を表現したり、‘Happy breakfast to you.’ など、肯定的形容

詞の使用などが見られた。また、患者の治療とはあまり関係が無いと思われる **small talk** (世間話) が確認できる場合もあり、制度的場面における **small talk** の重要性 (Koester, 2004) が伺え、患者を心理的に平常時に戻す (**normalize**) 効果があるという解釈に繋げることが出来た。「病室訪問型」では、患者の名前を頻繁に差し挟むことや、肯定的な形容詞の使用などの傾向から、より親しみを抱かせる効果のある **positive politeness** の側面が特徴として現れた。また、「病室訪問型」では、日常会話と比較して **how** が高頻度で使用されていることが、汎用コーパスの 1 つ **BNC** との比較により明らかとなったが、実際に **how** が、どのような語彙とともに使用されているか、共起する語彙の頻度を調べるためにコロケーション分析を行った。その結果、病室を訪れた看護師は患者に対して、進行形の **doing** や **feel** と併せて **how** を使う傾向があることが明らかとなった。特長的な表現として、患者の体調や気分を伺う質問、**How are you feeling today?** や **How do you feel?** など、看護師の挨拶後すぐに後続することが挙げられる。会話の終了部は、「面接型」と同様に、看護師主導で終了させるパターンが多く、**see you** の 2 語を含む後の来室あるいは面会を述べる表現が比較的多く見られた。**See you** を含んだ表現は、**lexical bundle** 分析でも確認出来ている (100 万語あたり 123 回の試算) ため、「病室訪問型」では特長的な表現であると言えよう。「病室外型」は、その殆んどが **small talk** であった。**N-P corpus** においては、程度の差はあるものの 3 種類全ての場面で確認出来ている。特に、「病室外型」では、**small talk** が好まれて使用される。この場面では、会話の開始部が、看護師による患者への声かけで始まる場合が多い。「病室訪問型」と同様、患者の名前を挟みながら、**do / feel**、進行形、また副詞の **today** の使用による患者の症状伺いや、会話の終了に向けた **turn** を取るのは看護師のほうが多い。終了部の宣言が、**'Oops, I gotta fly now'** などのように比較的唐突なものが目立つのも「病室外型」の特徴である。以上、3 つのタイプの場면을ジャンル分析の視点から分析した結果を基に、「面接型」、「病室訪問型」、「病室外型」の **Move** モデルを提示した。

4 章の第 3 節では、「発話行為分析」を行った。遂行動詞の現れ方やその選択・解釈の傾向は、集団の慣習と関連がある (橋元, 1992)。そこで、看護師の発話行為の特定と傾向を分析するため、**VRM** (Stiles, 1992) と呼ばれるコーディングシステムを使用した。**VRM** は、1 つの発話が「文字通りの意味」とともに語用論的見地から「コミュニケーション上持つ意図」という 2 つの側面から分類するものである。まず、看護師の全発話サンプル 792 を、文脈を踏まえて慎重に **N-P Corpus** にコーディングを施し、最終的な **N-P Corpus** の

VRM カテゴリー別の発生数と割合を算出した。次に、さらに無作為に 10%に相当する発話を抜き出し、VRM カテゴリーの整合性の検証を行った。Loewen & Philp (2006) は、データ一致率の検証を行う場合は少なくとも全データの 10%を抜き出して分析することを推奨している。コーパスから無作為に選びだして集めた標本 80 について、先に述べた同じ手順でカテゴリーの特定を行い、一致率の指標を示す κ 検定を行った。その結果、一致係数 κ は、0.87 となり (小数点第 3 位切り捨て)、最初に特定した VRM カテゴリーが偶然の一致による結果である確率は低いことが証明された。最終的に、N-P Corpus から一つの発話文あるいは一つの意味のまとまり毎に特定された発話行為の抽出合計数は、2,001 となった。その結果、特徴的に現れたのは、看護師は「面接型」と「病室訪問型」においては、主観的情報の提示を多く使用しており、同時に、積極的傾聴すなわち active listening がよく行われている、という傾向が現れた。また、患者からより多くの情報を聞き出そうとする探索的な姿勢は、特に「面接型」において顕著に現れている。面接時には、患者の問診をすることが多く、看護師による質問が最大の特徴であることが、VRM 分析においても確認された。politeness と VRM 分析の関連で考察すると、患者に対する face 侵害度のリスクが高くなる可能性の高い「面接型」や「病室訪問型」には、同意や承諾など (Acknowledgement) を端々に織り交ぜることで、心理的な負担を和らげたり、negative politeness strategy を行わないことにより、患者の負担度を軽減していると思われる言語方略を行うなど、複雑な politeness の態様が明らかとなった。患者の期待に応じて看護師としての役割 face を保持しながら言語行動を行うことは、同時に看護師自らの positive face の保持にも繋がっていると考えられる。

4 章の第 4 節では、「Impolite situation におけるポライトネス・ストラテジー」について分析した。B&L (1987) の理論を補完する 2 つの立場として、Stewart (2008) の face-protective strategy (face 防御方略) と、Culpeper et al. (2003) の提唱する impolite な発話に対する応答モデルを参考に 3 つの事例分析を行った。看護師は、時として患者をたしなめたり、また、患者から不満を言われる場合もある。職場においては摩擦 (conflict) が起こるのは当然であり、その中でどのようにポライトネス・ストラテジーを駆使しながら関係を改善していくか、という観点から分析を行った。提示した 3 つの場面の分析により、患者の不平・不満・非協力的な言動は、患者の症状や年齢などによって様々であるが、患者の impolite utterance (失礼な発言) に対して看護師が無視あるいは無反応の態度を取ることは、N-P Corpus では確認されず、肯定的理解 (相槌や共感など) による positive

politeness strategy の実行や、理解誘示を示したうえで説明の明言と説得を行うなど、看護師の役割・face の顕示や看護師自身の face protection (フェイスの防御) の役割が確認出来た。

第 5 章では、既存の看護英語テキストを用いて教材研究を行い、問題点を指摘し、それを踏まえたうえで、本論文の分析結果をどのように看護英語シラバスデザインに応用するかについて考察した。まず、7 冊の看護英語テキストについて、教材の構成、会話の流れ、politeness の 3 つの観点から教材研究を行った結果、全体的に共通していたのは、状況別シラバスの採用、用語の定義を含めた専門用語の習得、politeness の希薄性であった。全てのテキストにおいて状況別シラバスの採用がされており、その広範な状況設定により、結果として用語の定義と専門語の提示に多くを割いている。そのため、患者との会話も限定的、抜粋的であり、十分なコンテキストを提示しているものは、少ない傾向にある。そこで本論文では、コーパスを利用した分析結果を活かし、シラバスデザインには「語彙シラバス」(lexical syllabus) が最も有効かつ適切であると判断し、3 つのシラバスデザインを提示した。1 つめは、学習者自身がコーパスデータを確認することにより、発見学習の促進へつなげ、そこから得られたパターンやルールを follow-up として活動させるという Moran & Diniz (2005) 4 つのステップを、助動詞 CAN を例にして提示した。2 つめのデザインでは、Bennett (2010) の Corpus-influenced materials、Corpus-cited texts、Corpus-designed activities と、Koester (2002) のジャンルアプローチによる会話のマクロレベルとミクロレベルの視点を取り入れた。まず、Bennett (2010) の知見からコーパスを活かした教材提示の在り方と活動について述べ、次に Koester (2002) のジャンルアプローチを参考にミクロレベルの視点に基づく特定の発話行為に対する適切な応答の学習、ならびにマクロレベルの視点に基づく会話の全体構造と流れの学習について、N-P Corpus の具体的場面を用いて例示した。3 つめのデザインでは、会話構造、発話行為、politeness を学習出来るよう情報を付記したエクセルシート作成の有効性と、impoliteness の学習と理解の深化についても触れた。

終章では、まず各章のまとめを述べた。コーパスを利用した量的アプローチと質的アプローチを融合させた本論文での長は、第 4 章第 1 節におけるコーパス分析、および第 2 節の会話事例研究の分析とそこから導き出された move 分析に顕著に現れている。本研究では、コーパスを利用したジャンル理論のアプローチによりさらに具体的かつ詳細にポライトネス・ストラテジーについて描写することが出来、コーパスの活用は politeness 研究

にも有用であることを改めて示した研究となっている。本論文の分析結果を今後に活かすために、看護師と患者の会話コーパスを利用したこれからの会話研究の分野の展望としては、看護師の性別や年齢、勤務歴などの違いが言語表現にどのように関連するか、という視点が挙げられる。また、言語に依らない非言語コミュニケーションも無視出来ない重要な分野である。将来的にはマルチモーダル対話コーパスの作成などにつなげることが期待できるであろう。

論文の最後には、参考文献リストと付録を掲載した。